

## 「まち学習」のススめまちを題材にした総合的学習とは

北原啓司 弘前大学教育学部

### 1. 「まち学習」を知っていますか？

#### (1) 「まち」の何を教えるのでしょうか

「まち学習」という言葉があります。これは建築学や地理学の友人たちと、私と同じように建築から家政に入った東京学芸大学の小澤紀美子先生を中心にしたグループで、「まちづくり学習」ではなく「まち学習」ということで、ここ数年、研究活動を進めてきています。後でお話しますが、「まちづくり学習」になってしまうと、どうも小学校や中学校でテーマにした場合、「つくる」という言葉が入るために誤解されてしまうということがあります。つまり、「まちづくり」に関する知識を教える場とされると困るということなのです。小学校でまちづくりに関心を持ってもらうことと、まちづくりの単語を覚えてもらうことは違います。私たちは専門的知識を覚えるということ以上にまちの何を学ぶのかということに気をつけているわけです。

実は「まちをつくる学習」というのは、私自身どこで習ったかといえば小中高と全くなくて、大学の建築学科の都市計画という授業のなかで、経験したわけでした、やはり「まちをつくる学習」となってしまうと、大学の専門教育になってしまうであろう。大事なことは「まちをつくる学習」ではなくて、いま必要なのは「まちをたべる学習」ではないかと、教育学部に赴任して、将来家庭科の先生になるという希望を持った学生たちとおつきあいする中で考えるようになりました。工学部建築学科にいる時は「まちをつくる学習」をしてきましたが、「まちを上手にたべる学習」を子どもたちに伝えるということが、いま一番、大事なのかなと思うようになったわけです。あるいは「たべる楽しさを育む学習」というのが「まち学習」ではないかと思うわけです。

#### (2) いま、まちづくりで必要とされる学習は？

なぜ、このようなことを考えたかということ、と、「まちをたべる」ということに関して、これは都市計画の講演の時にも使う話なのですが、私たち住民が「まちをたべる人」、行政や建築の専門家が「まちをつくる人」だとすると、これまでは「まちをつくる人」がいろいろつくってあげて、「たべる人」はどう参加するかといえば、まさにたべる場面しかないわけです。つまり、住民参加といいましても、与えられた料理をたべた時に、ほめるという形でおかわりを陳情するか、反対運動を起こして料理を突き返すかという場面しか残されていません。このような場面のツールを子ども達に教えたとしても、あまり意味はないわけです。「まち学習」の先進地である英国では、そういう住民運動をさせるために子どもに住環境教育をしているわけではなく、全然違う意味でやっています。ですから、いくら都市計画用語や反対運動のやり方を教えたとしても、そこには、「たべる人」と「つくる人」との間の溝、何か境目のようなものがあるわけです。住宅の間取りに例えれば、「つくる人」のいる台所と「たべる人」のいる食堂の間に、厚い壁があります。いままで雑誌や新聞で紹介されたまちづくりの成功事例は、「たべる人」が運良く台所の中に入ることができて、「つくる人」の代わりにフライパンを持って料理を作ることができたケースです。自分たちが作った公園の方が行政の作った公園より良いでしょうというわけですが、間に壁が存在している以上は、そのような成功事例は一過性のものであって長続きしないだろうと思うわけです。ですから、「たべる人」である市民に料理のつくり方、つまり専門的な都市計画の仕組みを教えても仕方がないであろう。「たべる人」が真つ当な「たべる人」に成長していくための教育が必要なのではないかと考えます。

例えばカレーライスをつくる時に、カレーライスに使う玉葱を育てるの「たべる人」の役割なん

です。これまでのまちづくりでは、カレーライスを作るために『霞ヶ関』というスーパーマーケットに行き、全国一律のレシピに沿った形で、補助金、つまり玉葱やカレー粉や肉を買ってきて、結局どこも同じような街になってしまいました。でも本当の玉葱は地域にある。それを育てる人は「たべる人」なんですね。だから素材の提供も「たべる人」の役割でしょうし、それを味見させてもらう権利も「たべる人」にはあるだろう。そして後は「つくる人」にお任せして、たべる環境、例えば食卓にテーブルクロスを用意するとか、真ん中に一輪刺しを置くとか、あるいはお皿そのものを作るとか。それは「たべる人」の役割なんですね。そういうことを教えるのが「まち学習」であって、「つくる人」の養成はやはり専門家教育にまかせるしかないだろうと思うわけです。

私は弘前大学にきた当初、少し突っ張って、学生たちに「つくる人」のための教育をしようかと思いました。都市計画の用語も難しい理論もそのまま教えようかと思いました。しかし彼らには、小学校や中学校の先生になって、その学習の成果を発揮する場面があまりないわけです。むしろ、上手にまちをたべることでできる人を育てる教育、それは素材を発見する方法や味見のやり方や、受け皿づくりのための方法論を学ぶわけで、それに家庭科という非常に幅広い教科が対応できるはずだと思って、方針を変えたわけです。

ところで、行政の職員の方々の前でこういった話を講演する時には、「皆さん、まちをつくるだけでなく、一緒にたべましょうよ」と呼びかけます。行政は自分たちのまちづくりを評価する時に一般的にはアンケートをとりますが、実はアンケートをとる時間があつたら、一緒に「たべる」ことさえすれば一発でわかるわけです。これまではどうしても行政職員はレストランの厨房の中にいるコックさんのように、遠くで気にしながら実際に「たべる」場面には来なかったわけです。家庭の食卓を考えると、お母さん、お父さんはすぐそばにいるわけで一緒にご飯をたべるわけです。今日のカレーが甘すぎたか辛すぎたかは子どもの顔や食の進み方を見れば一発でわかります。私は行政マンに市民と一緒に「まちをたべる」ための教育を時々しています。そして、子ども達に対して、「まちをたべる」楽しさや面白さ、そして「たべる」ことの責任を説明したい。ですから私たちは「まちづくり学習」ではなくて「まち学習」と言っているのです。

### (3) 英国の住環境学習

英国の住環境教育はどのように行われているかといえば、先ほどから言っているように「まちづくりの教育」ではありません。「まち学習」の基本的なスタイルは発見的学習です。この発見的学習はどのような方法かといいますと、根底にありますのは見つけてきたものに対して自分が何か答えを出すというよりも、自分たちもきっとまちや環境に対して何かできるはずである、そういう自信と、いまこの環境を自分たちが何かしなければいけないという責任を感じさせるということ。この2つの目的から、自分の身のまわりの環境を歩き回ってきて、そこで発見したものに何らかの回答を出すということを、学習としてやっています。ですから、住環境や都市計画とはこういうものですよという座学ではありません。街を歩いてきてストリートファニチュア（ゴミ箱や公衆トイレなど）を見て、自然環境をからだで体験し、人に会って話を聴いてくるといった中で、何かを発見していく。これを住環境教育のプログラムにしてあります。

その一つの事例がタウントレイルという授業です。トレイルというのは歩いてくるという意味です。実際に私が見てきた英国の小学校の1クラスの生徒数は20人くらいでしたが、それでも先生1人で20人の子ども達と一緒にまちを歩くのは大変です。英国でタウントレイルという授業が成り立っている背景には、PTAやPTA以外の地域の方々、大学生のボランティアの存在があります。私の研究室でも小学校や中学校の現場に参画していますが、そういう形で将来学校の先生になりたいという学生と、あるいは建築家になりたいという工科系の学生が子どもたちと一緒にまちを歩くという授業をしています。

英国の「まち学習」はボクシングのボディブローのようなものだと思います。ノックアウトはすぐにはできないけれども、20年後にじわじわと効いてくるような力が、こういう教育の方法にある

と思います。授業も見てきましたが、学校で都市計画の専門用語など一言も教えていません。

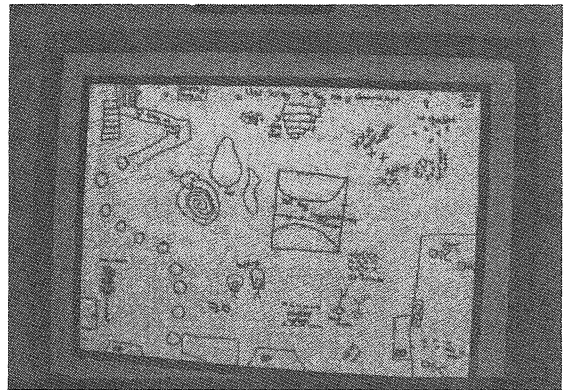
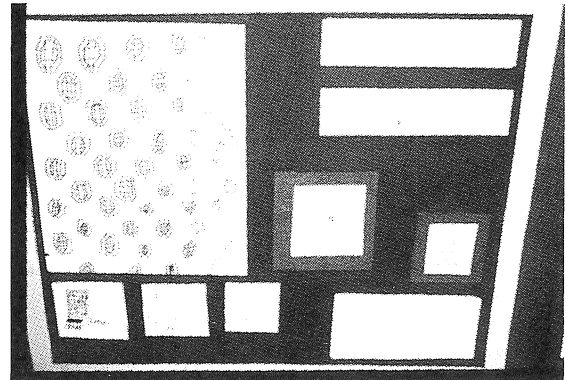
もう一方で景観から学んでいこうという学習方法があります。「Learning Through Landscapes」というこの方法の特徴は、まちに出かけて岩木山を撮って来なさいという話ではなくて、自分にもっとも身近な景観はどこだろうということから、あるフィールドを対象にして授業をするわけです。それは校庭です。子ども達にとって最も身近な景観は学校の校庭ですから、学校の環境を自分達でいじれない人間がまちに出て行ってまちづくりなどできないだろう、まずは自分たちの校庭は自分たちで整備していこうという住環境教育のスタイルです。つまりここで経験することが、将来「まち」というフィールドに出た時に効くだろうということで、校長の裁量でお金をつけて、実際に校庭を改良していきます。私が数年に見学してきた事例をちょっとお見せします。

ニューキャッスルというイングランドの北部にある都市の小学校の実践です。最初に何をしているかといえば、学校の敷地内から様々な形をスケッチしてくるという授業をしています。これは図工の授業の一つとしてやっています。ここに描いているのは窓ですが、さすがに小学校の敷地内ですから誰も窓を飾ってはいません。ただ無味乾燥に同じ窓を20も30も描いてあります。そうかと思うと、レンガのブロックの塀の絵とか、路面に紙を置いて模様を擦り出した絵があります。形を撮ってくるカメラを使わずに、デザインのモチーフ、この小学校でどんな形がいいのか子ども達に判断させるわけです。

使われ方の研究もします。これはある日の校庭の使われ方です。算数の授業を応用していますので、どこに何人いたか、後でグラフを描かせます。観察ということで、理科の授業にもなります。それで、このような調査図面が作成されるわけです。

その次にやることは何かといいますと、「the Good, the Bad and the Ugly」という英語が出てくるわけです。これは自分たちが学校の敷地の中で見つけてきた要素を、この3つに評価つまりチェックするわけです。the Good はキープしたいもの、つまり改造計画の中で残したいものとして、このニコちゃんマークのようなシールを貼ります。the Bad は取り除きたいもの、これはだめだというものです。一番大事なのは、the Ugly という言葉です。私はこの言葉こそ、イギリスの住環境学習の本質だと思っています。

ご存知のように Ugly を普通の英和辞書で調べると「醜い」とか「ぶざま」という訳になると思います。「醜いアヒルの子」というのが the Ugly Duck ですよね。しかしこの用語が一番大事だと思うわけでして、I want to のあとに improve と出てくるわけです。つまりこれは改善していくという意味です。つまり Bad ではないわけです。ここが非常に微妙だと思うのですが、ぶざまなものであっても、Bad ではない。顔マークの口も「へ」の字



the good, the bad & the ugly		
the good	the bad	the ugly
I want to keep...	I want to get rid of...	I want to improve...
<p>Tree</p> <p>Grass</p> <p>Path</p> <p>Wall</p> <p>Gate</p> <p>Window</p> <p>Door</p> <p>Light</p> <p>Shade</p> <p>Sound</p> <p>Smell</p> <p>Temperature</p>	<p>Grass</p> <p>Path</p> <p>Wall</p> <p>Gate</p> <p>Window</p> <p>Door</p> <p>Light</p> <p>Shade</p> <p>Sound</p> <p>Smell</p> <p>Temperature</p>	<p>Grass</p> <p>Path</p> <p>Wall</p> <p>Gate</p> <p>Window</p> <p>Door</p> <p>Light</p> <p>Shade</p> <p>Sound</p> <p>Smell</p> <p>Temperature</p>

ではなく、真っ直ぐなんです。ちょっと自分たちが工夫すれば good になるかも知れない。でも何もしなければ「へ」の字になってしまう。先ほど言いましたように、自分たちにもできるかも知れない。あるいは、自分たちで何かしなければダメになってしまう。何かする責任がある。そんなことを考えさせる Ugly という言葉なんです。

良いか悪いかだけでなく、この Ugly を入れたことが私は大事だと思います。つまりアヒルの子もいつか白鳥になるんだという、そのためには自分達が Improve しなければいけない、ということを考えさせるわけです。この方法がうまく行っているなど思うのは、こういうシートをつけさせると、子ども達はこの Ugly に一番反応するわけです。私たち大人が持っている「言ったってどうしようもない」という世界ではなく、「何とかしなければ」という気持ちがあるから、子どもたちは Ugly という部分にいっぱい反応してくるのだと思います。もちろん、英国人だって Ugly という言葉は決して好きな言葉ではないと思いますが、でもそうでありながら口の形を真っ直ぐにしたマークにしているという、こういう教育で、見つけてきたものに対して自分で考えて自分で行動しなければならないと判断させる。それを小学校5年生あたりでやっている。だから文部科学省が言っている「生きる力」という部分について、校庭という題材で一番手っ取り早くやらせるわけです。

そして、そこまでやったら後は「つくる人」におまかせします。この授業は誰が進めているかといえば学校の先生と地元の建築家が組んでやっています。建築の知識や図面を描くときには学校の先生はコーディネーターになり実際に教えるのは建築家、ニコニコマークをつけるような作業は学校の先生が指導して、協働で二期制でいうと半期かけて週二回の授業でやって、最後に図面を作って相手に渡して、「たべる人」としての役割はここまでなのです。あとは「つくる人」にまかせるといって授業をして実際につくられていくわけです。このような学習を英国の様々な小学校で、ちょっと強弱は違いますがやっているそうです。

#### (4) 都市学習センター

もう一つ大事なことからして、英国では学校外にも都市学習センターという仕組みがあります。これが非常に強力な組織でして、3年ほど前に学生を連れて調査に行ってきました。Urban Studies Center (以下 USC)、直訳して都市学習センターと言っていますが、意味合いとしてそれが良いのかどうかはちょっとわかりません。1975年にロンドンにノッチンデールに初めてできました。地域の歴史や開発、まち学習のための様々なプログラムを用意する、つまり学区の中にちょうど児童館みたいな感覚で、この USC が建っているわけですし、誰がここに行くかといえば、放課後に学校の先生が行くわけです。もちろん生徒も行きます。では、学校の先生が一体何をしに行くかというと、自分が学校で使う教材のための相談に行ったり、プログラムの仕込みに行くわけです。

1980年代には40箇所に設置されまして、地域拠点という形で学校の先生方がそこに行くのです。最初はロンドンで区営としてやりました。現在は非営利の団体、いわゆるNPOでやっています。サッチャー首相の時代に公共投資がどんどん削減されてしまし、それまで区でやっていた USC がどんどん減ったために、生き残りをかけながら民間の感覚で運営しています。ただ民間と言っても、もともと学校の先生だった OB の方とか、市役所の都市計画課に勤めていた人とか、まちづくりや環境の専門家、そして学校教育の専門家がペアになってこのセンターにいます。先ほど言いましたように、サッチャー政権以後、行政から独立した組織として再スタートしなければいけなくなりました。ですからこのセンターがどうやってお金を稼いでいるかということが重要なのです。とは言え、学習の相談にきた先生から、1回500円とかの相談料を取れるかという話があって、実際にやっているのは、講演会やセミナーのテキストや授業プログラム、例えば4回の授業でチームズ河畔を歩くプログラムとか、それをキットと称していますが、キットを売って何とか細々と運営していくわけです。

現在、ロンドンでがんばっているのはハマースミス&フルハムの USC でして、しっかりと儲かっているという話だったものですから、センター長に学生と一緒に会いに行きました。このセンタ

一は 1978 年に区役所が先生方を支援するためにつくったもので、つまり学校の先生に「まち学習」を全部おまかせといった仕組みをとっていないわけです。このようなしっかりとした支援体制を行政がつくっているところが、ある意味で日本とは異なるだと思います。そして 1983 年に区から独立して、民間運営の会社になりました。地域の都市環境をあらゆる面から学習する技術、地域環境を客観的に認識、見つけてきて問題を解決する上で必要とされる技術、知識そして指針を地域住民に提供していくことを目的として、この USC は活動しています。

そして子どもだけでなく大人も対象とした学習センターになっています。具体的にはどんなことを教えているかといえば、地域の教師達への支援、ナショナルカリキュラムにそったプログラムや教材資源の利用法の開発、一方で資料収集もしています。ある小学校の先生が、面白いまち学習の授業プログラムをやったということであれば、ぜひそれをという形でプログラムを集めてきてデータベース化する。これは地域の先生方にとって大変なプラスになるわけですし、センターに行けば様々なプログラムがあるわけです。別にパクルとかそんな意味ではなくて、いろいろなプログラムを自分の目で確かめていただきたい、それから地域住民向けに生涯学習センターとしても役立っているわけです。

都市は算数、歴史、地理、理科、政治、言語などが含まれた効果的でかつリアルな学習対象であることから、都市学習センターと称していると言います。けして建築家養成とか、将来、例えばオックスフォードの建築科に入る人を養成しているわけでも何でもなく、都市というものは様々なことを様々な効果的に勉強できるということで、そのための支援をやっていくから、先生方、楽しんでプログラムを自分たちでつくっていきましょうよということであって、けして「まちづくりセンター」とは違いますので、そこをちゃんと理解していただきたいと思います。

例えば内容的に調べてきたものをお話しますと、小・中学校、大学やコミュニティグループ向けのプログラム、プロジェクトの企画、ですから小学校の先生方に学校のプログラムで先ほどお話ししたタウントレイル、まち歩きのカリキュラムのキットを作ってあげたり、コミュニティグループ、例えば地域で川の問題についていつも憂いを感じているようなグループに、川歩きのための方法といったものをお教えするわけです。それから夏休みや冬休みのような長期的な休みの時に、先生方をトレーニングしてサポートしていく。もちろんそれは有料でやっていきます。そして、キット、あるいはミニコミ誌みたいなものを発行しています。それからコンサルティングも時々やっていまして、地域に関しての調査、あるいは調査のサポートをしながら、調査には学校の先生にも入ってもらい、一緒にやっていくことによって先生方に様々な材料を提供することができるわけです。地域の様々なネットワークングをしていく。これができるなら本当にいいことだと思うのですが、これを最初は区役所がやろうとしたということで有り難かったのですが、それがいま民間運営になったわけです。

イギリスはこういう民間が仕事をするときに補助金を日本とは違いたくさんくれるわけですが、それでも一つ原則があります。1年間の決算を出した時に、国や区からきた補助金の金額よりも自前で稼いだ金額が1円でもいいから高くないと、次の年から補助金が削られます。つまり補助金に依存している NPO のグループは次の年には補助金がもらえなくなってしまうわけです。ですから今まで潰れてしまった都市学習センターは補助金の額の方が多かったり、自前の教材を売れなかったためにどんどん消えていきました。ハマスミスが 20 年たっても唯一残っている理由は、実は彼らの教育教材や調査、例えばまちづくりの調査をやってくれと言われたら、1回 50 万円で受けるわけです。だから、ちゃんと有給の職員も雇うことのできるお金があるのです。

基本理念についてはまさに実践的な方法。やはり先生と一緒にコラボレートしていくという話、それから学習教材は地域そのものであるという話。これはアイリーン・アダムスという英国の住環境教育の第一人者の先生に言われました。自分と違う考えを持っている子どもが、同じまちを歩いていることに気づいてほしい。多様な感覚があるということを見つけてほしいのであって、まちを歩いた時にこの街はこうしようという方法論を教えるのではなく、違う考えがあってもいい

んだということを、まず明確にしなければならないと言われました。環境教育をしていくうちに、いずれは地域コミュニティに住民として参加させ、巻き込んでいこうという狙いがあります。センターの活動によって子どもたちが自分達の地域の都市環境やその変化の過程など幅広く理解することが可能ですし、子ども自身が環境に対して関わりを持つ、自分たちが接する役割があるということを感じさせるために、この都市学習センターがあるわけです。

私はこのセンターをなんとか日本で実現させたいと思って、動いてもらっているところがあります。それが西目屋村にある砂川学習館です。私が英国の USC を見て、国土交通省の津軽ダムの所長にお話ししたら、「俺達のやりたいのはそれだ」と言うのです。行政の専門家が学校の先生をサポートするために、施設が必要になります。あそこは大きなダムを作るために砂子瀬小学校が廃校になるということで、数年前に総合的な学習に協力させていただいて、廃校後は砂川学習館という施設にいただきました。西目屋の山奥の施設ですが、モデルは英国なのです。それで弘前の理科学研究会のトップだった千年小学校の元校長の福井庸雄先生に行って頂いて、皆さんをお待ちしているわけです。なかなか大人数に来てもらえないので、それほどお金は入らない世界ですが、ゆくゆくは英国の USC のようにしたいと思い、初めて設立したのがあの建物なんです。

ところで、ハマスミス&フルハムの USC は、センターという名前とは違って、ほんの小さな建物です。この建物自体は、ラルフ・アースキンという世界的に有名な建築家が設計したもので、2階と3階がセンターになっています。ちょうど教育実践総合センターと同じくらいの規模だと思います。そして地下には地域の図書館があり、もう20年、30年前の新聞のデータベースがはいっています。私達が行ったらすぐそこに連れていって、日本のデータもあるよと言われて、相撲の記事を見せられました。

常駐のスタッフは、中学校の社会科の元教師と元行政マンです。こういうそれぞれの分野のプロがいるから、仕事ができるのだと思います。実際のまち学習で地域を歩く時にはポラロイドカメラで写真を撮ったり、インタビューやスケッチをします。大学生のボランティアが手伝う形で、撮ってきた写真を地図に貼っていきます。その後、地域の人々、例えば区役所のおじさんに来てもらってお話を聴く。最後にそういうお世話になった人達を全部集めて、成果の発表会をしていく。学校の授業ではありません。センターで放課後にやっている授業です。とは言え、学校の先生方もここに来て、せっかくだから、ここのスタッフと一緒に授業をするということもやっているようです。

建築の人間として思うのですが、まちを勉強しなさいという話をして、このセンターのように、その間に立つてつなげる役がいないと、役所の専門家と学校の先生が、直接話をできる機会などはなかなかないわけです。

そういう意味でいうと、かっこよく〇〇センターと言わなくていいですから、教育と行政との間に立つような組織が必要だと思います。私は大学自体がそういう機能を持っていると思っていろいろやってきましたが、砂川学習館のようなちょっとした建物あるいは児童館というものが、子どもの福祉ということ以上に、地域学習の拠点として成立するように少しテコ入れしていくということが可能なのではないかという気がしています。

##### (5)津軽の子供たちのタウントレイル

こういうようなことを日本に帰ってやってみたということで、先程の「the Good, the Bad and the Ugly」、附属小学校の5年生に写真を与えて、これを研究した学生はこのまま大学院を卒業して学校の先生になることをやめてなんと私と同業で住居学の先生をしているのですが、イギリス流にやってみたわけです。24枚撮りカメラで1週間で撮って来て下さい。10枚が好きな景観「the Good」、10枚が嫌いな景観「the Bad」、最後の「Ugly」という英語を小学校5年生に言ってもわかりませんので、「気になる景観を撮ってきて」と依頼する形でこいということで、この3つを撮ってきてもらいました。



やはり岩木山の写真が一番多かったのですが、私がおもしろかったのは岩木山の写真を持ってきた120人の子どもたちのそれぞれの岩木山の構図が全く違うことです。右の写真は道路沿いの山の形がきれいに見えるところ。もちろん、皆さんご存知の天守閣に行って撮ってきた子どももいます。しかし自分の好きな岩木山と言って傑作だったのは、自分の家のトイレの窓から撮った岩木山、トイレの枠が見えその中に岩木山が見えます。なぜその子が自分の一番好きな岩木山だとして持ってきたかと聴いたら、その男の子は「毎日、朝起きたらうんちをしなければならぬ。ぱっと窓を開けた時の岩木山が私は好きだ」と言うのです。その子にとって岩木山は、トイレの窓から見えないといけないわけです。こういうこだわりが実はあとで環境に子どもを巻き込んでいく時に大事なことだと思います。観光写真の岩木山の写真はいらぬのです。そういう写真だからいいと思うのです。



私はいま青森県庁に頼まれて、景観教室を小学校4年生を対象にやっています。写真を撮るお金がないのでみんなに絵を描いてきてもらって、それで私が授業をやるという形のものでした。このあいだも桔梗野小学校の4年生を対象にやりました。こども岩木山が一番多かったのですが、これも傑作でした。トイレではありません。〇〇ちゃんの家でカメと遊んでいてパッと見ると岩木山があるとか、それぞれ個人的にこだわりの岩木山を長々と説明してくれるわけです。岩木山という3文字を説明するために様々な説明がつかます。私はそのことが大事だと思います。

そういう写真があるかと思うと、〇〇ちゃんの家で風除室というものを撮ってくる子もいます。ですから子どもたちはいつも見ている風景を本当に捜してきてくれました。いま青森県が小学校4年生に配布する景観副読本があるのですが、何とそれに使ってもらっています。誰が撮ろうが子どもが撮ろうがこれが景観の要素だということを見てもらえればいい。イギリスの窓の絵を20枚描いて来なさいというのと同じスタイルです。冬休みじゃだめなんですね。夏休みにこの空間がどう使われているのかがおもしろいと思います。秋だからここは空いているわけです。冬だここは寒いから、北国独特の風除室なわけです。これも一つの景観資源です。



一方、次はBadの写真です。これを見て一発でわかる方は弘前に精通している方です。実は市内のある小学校の横にある公園のトイレです。「こんなトイレでおしっこなんかしたくない」というコメントと同時に小学5年生の男の子が写真を撮ってきました。確かに不気味で汚いです。実は弘前市役所の職員を対象にした研修でこれを数回、まるで暗示のように見せましたら、とうとう今年きれいになりました。市役所の人気づいて、少しきれいになりました。たようです。



これをご存知の方は7、8年前から弘前にいらっしゃる方です。私がこの大学に来た時にはこの建物がありました。今、ここはビデオ屋さんに代わっています。樹木町のかつてはスーパーだった所ですが、ここの写真を撮ってきた子どもが「誘拐されそうだし、不気味でお化けが出そうだ」と言うわけです。そして最後に「このままにしておく弘前市役所が悪い」というコメントです。うちの学生が



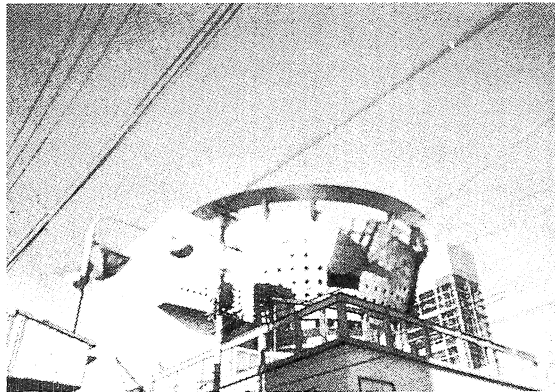
「あのね、これは弘前市役所の場所ではないから、市役所が悪いわけではないんだよ」と言いましたら、その時の子どもの答えが今も忘れられないので市役所の職員の方によく言うのです。「そんなことは僕だってわかる」とその男の子が言うのです。「でも、街の中で、気持ちの悪い場所や不気味な場所など怖い所があるのに、そのまま放ったらかしにしておくのは市役所が悪い」と言うのです。

私はそれが正論だと思って市役所の人に伝えました。ハイローザ跡地をどうするのかということと同じです。そこは弘前商工会議所が買いとったわけですけど、じゃあ、商工会議所さんお願いしますではなくて、商工会議所が何かしていく時に市役所がやる役割があるわけなんですね。だから、何もしないのはやっぱり悪いと思うわけです。そういった発想は小学校5年生の、変に世間のことを諦めたりしないフェアな気持ちから出てくる、ごく自然の発想であり、また都市計画をやっている立場から言うと、非常に大事な話です。公共スペースというのは、弘前市役所が持っているから公共のスペースではなくて、みんなの場所だから公共のスペースということです。

「公共」という言葉を、実は日本は履き違えました。ちょっと余談になりますが、私は博士論文をまとめるにあたって「公共」という言葉に興味を持ちました。そもそも「公」という言葉がいつ日本に入ってきたかを調べましたところ、実は「公」は「私」と同じつくりを持っている感じなんです。「公」という字のなかに「ム」と書きますが、あれは「私」という字の右側の「ム」なのです。実は「公」という字は「私」を開くという意味だそうです。上に2本手を広げて私を開く。だからお上とか行政という言葉と全く違いまして、「公」というのは私達が開いていくという意味なんです。だから民間の土地であっても公共性を持っていいわけです。なぜ日本で今の公共の概念になったかという、大和朝廷の時代に中国から「公」という字が入ってきて訓読みで「きみ」という字に変わって、「きみ」というのは、当時は王様ですから天皇です。ずっと江戸時代まで「きみ」ということは天皇を指すわけです。そして、明治になり福沢諭吉が有名な「天は人の上に人を作らず・・・」の世界で、「公」というのが天皇でなくなって、市民社会のなかで上になるものという世界でその時に一番わかりやすい概念は行政だったのです。公共権力だったのです。ですから、アメリカやヨーロッパのパブリックの考え方と日本の「公共」は違います。ところがこの「公共」という発想を子どもが見てくれているわけです。

次は「Ugly」。さすがに気になる景観としたのですが、まずはこの写真でして、「中三デパート」です。何だかよくわからないけどへんな写真だということで、写真のタイトルが「カップラーメン」でして、この感覚で私は二重丸をあげたいのです。おもしろいねと。

ただその子どもがうちの学生とじっとこの拡大した写真を見ていたら「先生、これは気になる景観ではなく、嫌いな景観に変える」と言ってきました。その理由は何故かという

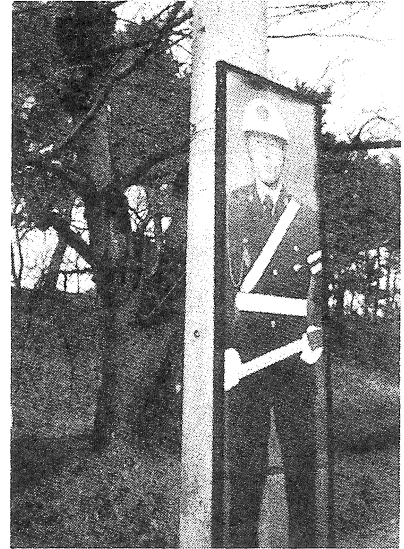




と、この写真を撮っている時は全く気づかなかったということですが、拡大してこの写真をみたら「何だこの電線は」という話にになったらしくて、その子どもとうちの学生が1本ずつ電線を数えていたら、あの下土手町の単なる1本の通りに、何の電線かよくわかりませんが全部で19本もありました。

皆さんおわかりでしょうか。いま下土手町は電線を地中に埋設しています。良くなりました。しかし、その当時、ここに19本もあった。何だろういったい、という話になるわけです。写真を撮った時、その子が何も気づかなかったというのは、日常歩いていてある意味で慣れてしまっている景色なのです。

さてこれは、僕が最も好きな写真です。何と、「気になる警官」だと言うのです。「だって北原先生は気になる景観を撮ってこいと言ったじゃない」と。私たちはこういう看板を見ると、ここが交通事故多発地域だと思うわけです。街の中にこういう変なものが立っていることに、私たちは麻痺していますが、5年生にしてみたらこれは変な写真なわけです。こういうふうなことを何かヒントにしていくと、プロにとって参考になることも、たくさんあると思います。

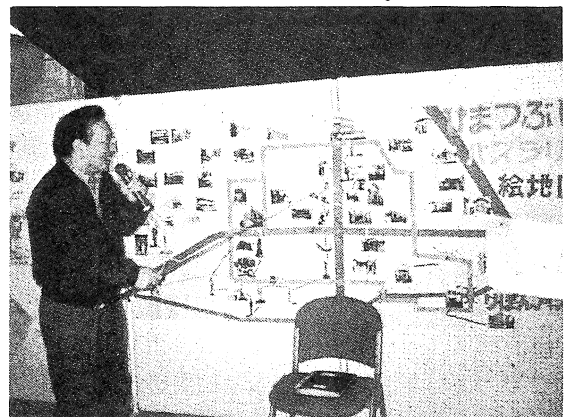


#### (6) いわきまちづくりコンクール

そういうことは学校教育では無理なので、地域教育でやっていこうというのが「いわきまちづくりコンクール」です。これは岩木町ではなくて、福島県のいわき市です。私は、このコンクールにずっと関わってまして、まちの宝物をみつけてきましょう、というコンクールなんです。Badも見つけてくるのですが、大人も子供もそれぞれに見つけ出そうということで、社会教育的なノリでやっています。実行委員会を作って行政のプロとまちのサポーター、このサポーターのなかには学校の先生も入っていますし、地域住民、主婦、私の研究室もサポーターになっています。毎年10万円という賞金で、宝さがしのコンクール（絵地図コンクール）をやっています。千葉大学の先生と東京の建築家と私、あと地元の人が審査員ということでやっています。

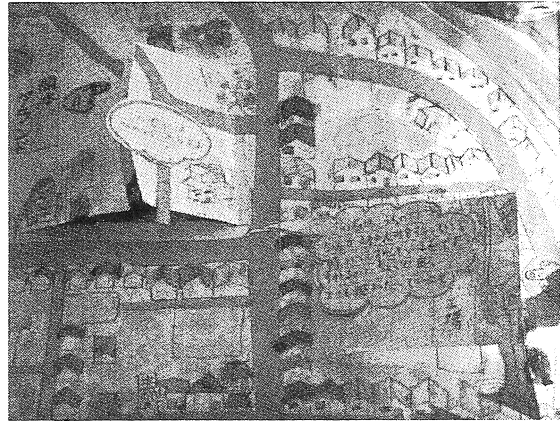
ちょっと応募作品を見ながら「まち学習」の雰囲気を味わっていただきたいのですが、大人が普通にやるとどうなってしまうかということをお話します。これは、3人組の大人たちが応募したものです。それは何かと言うと、いわきの街なかを週末に歩き回って写真を撮りまくったわけです。それを地図に貼り付けて、一番いいルートを作り、そこに100円バスを走らせるといいのという提案です。一生懸命がんばっていらっやって良かったのですが、ここに出てきた写真は誰もが知っているいわきの観光名所の羅列なのです。これだと観光協会と市役所がうまく考えてやれる、でも本当に欲しいのは、いわきの皆さんが知らないものであって、何とか発掘してほしいという意図があるので、この作品ではグランプリの10万円は来ないのです。

それではこれに勝つのはどんな作品かといえば、例えば小学生の女の子が見つけた「私の停留所」というスケッチブック1冊の作品でした。この子はバス通学でなくていつも歩いていますから、停留所という感覚はおかしいのですが、いつも歩いている学校の登校路に見る風景10ヶ所を停留所にして



説明が書いています。一つ目の停留所は山田さんの家の縁側でした。山田さんのおばあちゃんが縁側でみかんを食べてまして、その脇でその子がちょこんと座って時折食べさせてもらうというものです。山田さんの家の縁側は停留所だと、そういう小さな空間とか環境について歩いている速度の目線なんです。先ほどの大人のスピードは、自動車の速度でものを見えていますから、〇〇〇と〇〇〇とをつないで地図になるのですが、この子は歩いていくスピードですからスケッチブックで順番に見ていくという物語になっているところが大きく違うわけです。グランプリにはなりませんでしたが、とても印象的な作品でした。

環境問題を意識して、リサイクル公園の模型を作ってくる子供もいれば、この写真は私がグランプリに押した兄妹の作品です。「お兄ちゃんが見つけてきたいわきの石」。きれいな絵地図をおかあさんと3人で作ってきました。この子が見つけてきた宝物は路傍の石なのです。この三叉路の角にある漬物石くらいの大きさの石です。「この石はうちのおばあちゃんが妹の恵美を待っている時にいつも座っている石です。座るのにちょうどよくとても役にたっています」と説明書きがされています。この文章からすると、ここは幼稚園バスの送迎場所なのです。それで



5年生の男の子がいわきの宝物は何だと聞かれた時に、おばあちゃんがいつも座っているあの石だということを見つけたことは、本当に素晴らしいと思うわけです。

それではこれを誰がどう活かしていくかというのが問題だと思うのです。「まちをたべる人」として、これを見つけてきてくれたのです。これを使って「まちをつくる人」は何を考えるべきか。何しろちょっと離れたところに公園があるのです。この公園には誰も座らないベンチがあるのです。実際に必要なものは、ここに街路樹の植樹桝があって、そこにちょっと腰掛けられればそれでいいのです。そういう計画をしないで、ここに緑を植えて公園を作ってここは単なる歩道、ただの道路にしようとして市役所の人がやってしまうわけです。「まちをつくる人」と「たべる人」との関係から言えば、こういう「まち学習」のアウトプットそのものを、市役所がどう活かすかというのは、これからのやり方次第ではとても重要になってくると思うのです。

嘘みたいな本当の話でこの男の子のお父さんが、当時どんな仕事をしていたかと言えば、何といわき市道路計画課係長と言っていました。しかも、ここの道路の拡幅工事を担当していると言うのです。冗談でしょと思いましたが、自分の息子が見つけてきた石を、下手をするとお父さんが真っ先にブルトーザーで運んでしまうわけです。別に、小さいものを見つけたから褒めてあげるということではなくて、まちをつくるためのヒントを見つけてくる。こういうヒントの方が、最初に出たバスツアーを提案する大人よりも、本当の意味で役に立つのだと思います。

ところで、こういうプロジェクトをやりますと小学校が総合的な学習の先駆けとして応募してくるわけですね。この写真を撮ったのは1995年ですから総合的な学習はまだ始まっていませんでした。ただ、もう先取りした先生方はどんどんやってきました。このクラスは40人で来ました。高久小学校というこの学校は、古い方言をカルタにするために、おばあちゃんにインタビューをしています。



つまりいわきの宝物はもう標準語になってしまっているけど、いわき弁であるというのです。みんなで古い民話を、方言を使いながら紙芝居にするという作品でした。いわきでは、このように学校先生方をその気にさせながら、地域のイベントが進められてきています。

## 2. 「まち学習」と総合的な学習の時間

ややイベント的な「まち学習」の話をしてきましたけれども、いよいよこれを学校教育に使うという話をした時に、まち学習を総合的な学習で考える時にポイントとしてレジュメにも書いておきましたけれども、文部科学省の教育課程審議会が出した総合的な学習、生きる力の目次の文章を改めて読み取ってみると、これは先ほどの英国の都市学習センターに書いてあることとほとんど同じではないかと思ってしまいます。情報を集めて、調べて、まとめて、討論していく。大学でも総合演習という科目でやっていますが、主体的、創造的に取り組む態度を育成する。自己の生き方について自覚を深める。これが1998年に出されていたわけです。

そういう形で総合的な学習の時間をとるべきだと書いてあるわけですが、ご存知の通り総合的な学習にはいろいろなことが言われていまして、私が見てきた一つのシンポジウムでも、「いずれは消えるのでしょうか？」と文部科学省の方に対して、直接訊く先生もいました。そういうふうにしてゆとりの時間と、ある種混同されてきていますので、総合的な学習については、何となくゆとりの時間を使いながら、教科と違い総合的なものをすればいいんだと割り切ってしまうところに、やや問題があるような気がします。

さて、先ほど発見の方法の話をしましたけど、総合的な学習がこの発見の方法の4つのキーワードに当てはまるということをお話したいわけです。見つけて、それを自分たちで調べて、それからどうするかをしっかりと考えてみる。そしてこれを活かして創造的な提案をする、という一連のプロセスは、まさに「まち学習」のプロセスなのです。したがって、「まち学習」が総合的な学習の流れにフィットするだろうと思ひまして、いくつかの学校に「まち学習で総合的な学習をやりませんか」と声をかけてきたのです。

### (1) 愛知県西尾小学校の「まち探検」とPTCA

日本で最も「まち学習」が進んでいると言われている、愛知県西尾市立西尾小学校の事例を紹介しましょう。これは社会の先生方が中心になってやっている授業です。ちょっとお見せしたいと思います。

愛知県なので離れているのですが、縁がありまして、まちづくりやワークショップの授業に呼ばれて、何回か授業を教えて、そしてうちの学生たちもここに行ってきて、卒論を書いています。校長先生は赤堀さんといって、奥様が津軽の出身です。その方が何年か前からPTCAという言葉が提唱されていまして、「まち学習」をしていく時はPTAでは無理でありC (Community) が必要だと。地域の人材をどうやって学校教育に活かすかによって、「まち学習」というか総合的な学習を進めていくことができると、ずいぶん前から提唱されています。

この小学校では、総合的な学習の見本市のようなものを2001年と2002年にやりました。私はその時に招かれまして、そこで見てきたものを、今日は皆さんにお見せいたします。

ここでの3年生の「まち学習」は、とにかく「まちの先生」を捜しまくって人と会って来て、絵地図をつくるという授業です。おじいちゃん、おばあちゃんは〇〇名人です。西尾市は抹茶の生産地ですので、やはりお茶の話が出てきます。



お茶の入れ方について、しげ子おばあちゃんに訊いてくる。一方で齊藤さんのおじさんはすごい。調べて見ると日曜大工がすごい。そんな調査結果を模造紙に書くわけです。

一方で、学校にお化けかぼちゃを作った名人のおじさんを連れてきます。お年寄りだけでなく、若い人も連れて来るわけですし、この子になぜこのお姉さんを連れてきたのかと先生が訊くと「若かったから」などという答えが返ってきたりとか。でも、本当の理由が実はおもしろいのです。この女性は証券会社の社員なのです。まちを歩いていつも、証券会社の店頭の数値の羅列というものの、子供たちは大変気になるわけです。+24とか-9とか何だろう。毎日数字が変わっている。それでこの女性に訊きにいったそうです。そこで「学校にきてください」ということで、彼女が来て株式について説明してくれる。

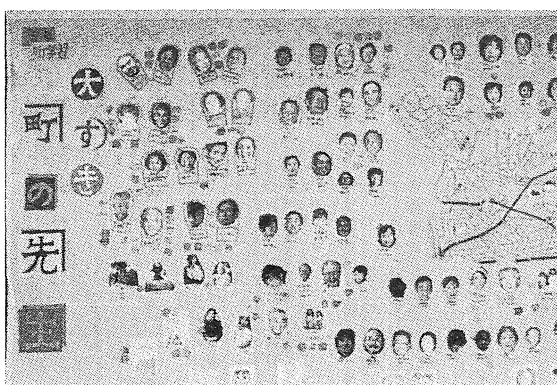
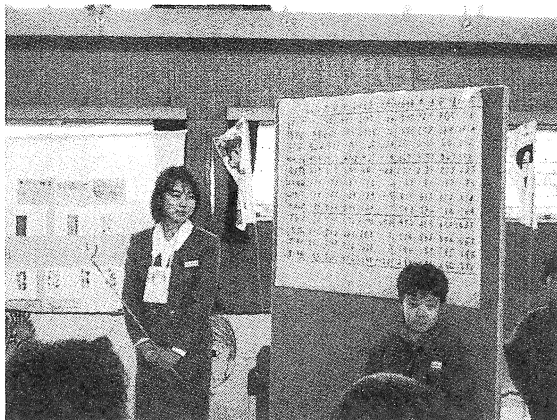
そんなわけで、すべての先生を見つけてきてこの地図に書こうとしたら地図に載り切らなかったの、まわりに顔写真を貼って「まちの先生」という形でまとめたのがこの写真です。まちづくりの勉強ではありません。まちの人に会ってすることを「まち学習」と言っています。そして時々、お世話になった「先生」を集まって、このような発表会をしています。

4年生になると、ただ会って来るのではなくて、ある職業、つまり西尾市は各種民芸品の生産地であり職人の方がたくさんいらっしゃるの、社会見学的に会いに行くという、「職人探検隊」という形で目的が一つ加わります。

5年生になると、まちへの提案になります。こんなまちにしてみたいという形で3年生、4年生で見つけたものを活かしながら楽しい計画として、西尾のまち改造計画を作ります。何となく「まちづくり学習」的な流れになっています。ポスターセッションで発表をして、その時お世話になった方々に来てもらって、いろいろ評価してもらうという授業をしているわけです。

6年生になりますと、私が行って、まちにある古い蔵の利用法をまちの人に提案するというワークショップを行いました。

これはスマイル学級の発表風景です。これは私が子供の頃は特殊学級と言っていましたが障害のあるお子さん達のクラスです。つまり総合的な学習は普通学級だけではなく、スマイル学級でも体



験させなければならないのだということで、この小学校ではカリキュラムを作っているわけです。他のクラスと同じようにまちに出かけて探検してきました。スマイル学級の子供達がまちを探検して感じた印象は、お店屋さんがおもしろいということなんです。自分たちでお店屋さんごっこをしたいという話になって、それでは何かを売らなければいけないじゃないか。ではこの授業ではどういう展開をしたかと言いますと、「自分たちのお店を開こう」。どんなものを売っているか見学してきて、そして自分達で何かを売ろう。何を売ればいいんだろうといった時に、図工の授業を絡ませて来年のカレンダーを作ろうということになって、お絵かきをしてカレンダーを売っています。これもまち学習なのです。

さっき言いましたようにまちはどんな場所なのかということで見た時に「お店がいっぱいある場所だ」と感想を持ったことで、彼らはお店を開くということを学習したのです。当日、私達が行った研究会ではこうしてカレンダーを売るということを体験していました。これもすべて総合的にやっている「まち学習」だと思います。

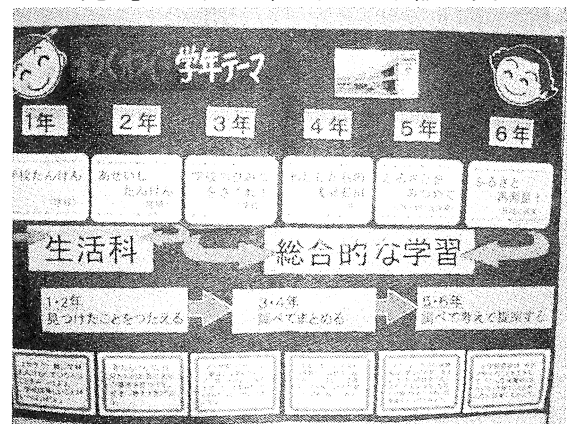
## (2) 黒石市立浅瀬石小学校の学習プロジェクト

実は、西尾小学校の「まち学習」はすごいですよ、いろいろな場所で講演してしましたら、黒石の浅瀬石小学校の先生が、実際に西尾市まで行ってくれまして、「あれすごいわ。今度、北原さんの研究室と一緒にやりたい」と相談に来てくれまして、それ以来、お付き合いする形で「まち学習」を始めました。私たちが考えた浅瀬石小学校での「まち学習」の定義は、「子供ひとりひとりがまちを歩いて発見して来る様々な場所、人、出来事などがすべてが地域の宝物になる。子供たちが発見した事実に価値を見出し子供自身が調べていくプロセスを評価していく」というものです。木村美穂子先生を中心に進められています。そこに、私達が入って一緒に歩いたり、授業の協力をします。今からお見せするポスターは、昨年の2月に西尾小学校の総合学習の見本市に呼ばれまして、浅瀬石小学校が発表してきたものです。

浅瀬石小学校ではこの学習プロジェクトを1年生から導入しています。1年生は学校探検、学校の中をデジタルカメラを持って、おもしろいところを写真に撮って歩き回る。一番おもしろかったのは校長室の校長先生の顔というのが印象的でした。そして、「浅瀬石たんけん」「学校の秘密を探れ」「私達の浅瀬石川」「ふるさと再発見」、最後は「黒石駅前に公園を提案する」ところまで系統的な学習にしています。

地域との連携ということでは、公民館で主催している「ふるさと授業」を小学校の先生達が受講したそうです。理由は先ほど説明した英国の都市学習センターと一緒にしたいと思います。公民館事業に参加して教えるべきネタを仕入れてきて、子供達に教えようという形で勉強したとおっしゃっていました。後は私たちが協働で入りましたのと、地域の参加ということで、いろいろなことを行いました。西尾小学校の「まち学習」の影響が強いですから、いろいろな人に会って行くことが中心になります。川の先生とか土地改良区に行こうとか、「まちの先生」に会って来ようという話です。

私の研究室の学生達も「まちの先生」に昇格したようです。うれしいことにこの学生たちは、運良くその年に小学校の教員採用試験に受かりました。赴任してすぐに一人から電話が来しました。こういう経験をしていますので、総合的な学習をどうしようかという時に、新人のくせに「まちを歩けばなんとかなりますよ」と言って、響盛を買ってしまったそうなのですが、後期からはその責任者になったと言っていました。「まち学習」の経験を西尾や浅瀬石でさせてもらったお陰で、彼らはこういうことに関して動けるようになりました。

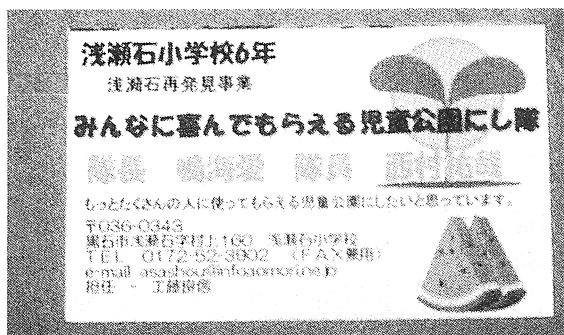




おもしろいのは図工の時間にデジカメとコンピュータとで名刺を作りました。人に会うときは「浅瀬石小学校の〇〇〇〇です」と名刺を渡さなければいけないので、子どもたち一人一人が名刺を作っています。そうやって人にちゃんと話を聴いてきなさいということを指導しているわけで、地域でも非常に喜んでもらったということです。

そして調査のお礼に自分達でつくった手ぬぐいを置いてきます。これも家庭科の授業とコンピュータの印刷も含めて何でもかんでも教科として使えるわけで、それを「まち学習」という言葉で呼んでおり、「まちづくり学習」ではありません。

現在でも浅瀬石小学校では「まち学習」が続いていて、私達も時々、活動の中に呼んでいただいています。



### 3. 「まち学習」の評価とは

#### (1) 総合的な学習の評価が直面する課題

「まち学習」の現場で、先生に質問された時、どう答えるか一番困るのは、「ここまでやったものをどうやって評価しましょうか」と現場の先生に訊かれた時なんです。

実際問題として、私がやっている「まち学習」にしる、総合的な学習の発想にしる、そして英国の住環境学習の発想にしる、人と違う多様性を育てる発想が必要であって、全く皆同じ目標像を目指しているわけではないと思うわけです。総合的な学習だから総合的に評価しなければならないということではないと思います。総合的な学習に絡んだもので、もしかして家庭科の授業が何かできるかもしれないというだけの話だと思うのです。問題は個々が発見の方法であるものを見出して、それから目標像を設定して自分なりの解決案を提案していくという一定のプロセス、最初の目標設定の高さが多少低くても高くても、そこまでどうやって到達したかというところで見えていくのが、私は「まち学習」であると考えます。

ですから、自分が立てた目標をしっかりと克服できているかという話です。なぜこんな話をするかと言えば、実は私の研究室が協力する形で八戸市のある小学校で「まち学習」の授業を実施したことがあります。それはニュータウンにある学校なので、まちの歴史を調べても何も出てきません。それでも、みんなでまちを好きになってもらおうと思って歩きまわして、10年後の自分たちの姿という映画を作ってくれという授業をしました。映画というより紙芝居です。

その時のことで、今でも忘れられないことがあります。私が学校に到着しましたら、あるグループが先生に怒られていました。紙芝居のシナリオを見て、先生がどういう理由で怒っていたかと言いますと、そのグループが描いた紙芝居の一つの絵は、ニュータウンのお墓で肝試し大会をやっているわけです。お化けの絵が描いていてそこを子供達が怖がって走っていくという絵でした。その先生が「これは授業でやっているのよ。何であなたたちのグループはそこでお化けやお墓の絵を描いているの」という言い方をして「だめでしょ」と言っていたのです。

なぜ、子どもたちがそのお化けの絵を描いたかということが実は問題なのです。「先生、ニュータウンにはお墓が1個もないの」と言うのです。みんなどこか古い街から引っ越してきているのです。古い街にいと夕方どこで遊ぶといった時に神社の境内とかお墓とかなんですね。夜遅くまで遊んでいて、一人ずつ帰っていく段階で、暗くなってだんだん怖くなるのですが、それがその子供達にはないわけです。実は、死んだおじいちゃんがニュータウンのお墓に入っているのです。そのお墓のそばで肝試し大会をやっているわけです。こういう気持ちというのはすごく大事ではないかと、まちづくりの人間として思います。この子達はおじいちゃんが死んで墓がここにあるという形で、このまちに住んでいたい、住んでいくことが当たり前だと思っているわけですから、墓もあ



るのです。腰掛けでニュータウンにいてどこかに帰るという発想ではないのです。おじいちゃんはこの中に当然入る。そのおじいちゃんのお墓にお供えしに行ったときに肝試し大会をやっている。これはけしてふざけているのではないんです。

もう一つ、なんとかこの成果を成績に反映させたいと担任の先生に言われて「あら」と思ったわけです。それで「どうするんですか」と訊いたら、2つ考えていると。「紙芝居を作ったので図工の評価に反映させたい」と言ったのです。もう一つは「作文を書いているから国語かな」というわけです。私は現場にいませんから偉そうなことは言えませんが、それは違うと思いました。私自身はそういうもので評価させたくてやっているわけではない。絵が上手だったら5になって、下手だったら3という話では全然本質と違うだろうと思うのです。この問題は大変難しいと思います。

## (2) 総合的学習の通知票？

愛知県東浦町の緒川小学校というところでは、総合的な学習を想定した通知票を作っています。左側が普通の通知票、右側に総合的な学習の評価、これが白紙なんです。実は通信簿には罫線が引かれていて、普通は、国語、算数、理科、社会と○をつけるところがありますが、総合的な学習は学期によって中身が全部違うので、そこに紙を貼るという変わった通信簿なんです。この小学校の通りにするという話ではなくて、小学校なりに総合的な学習というものをどう評価するかということを試行錯誤でやっている事例を、皆さんにもお見せしたいです。

## 4. まち育てのススめ

工学部から教育学部に来たという私の経験自体が「まち育て」という言葉を生み出して、今やこの言葉は全国でも使っていただくようになりました。弘前市の都市計画マスタープランのキーワードは、「まちづくり」ではなくて「まち育て」でやっていただいています。

なぜかという、もうどんどん物を作っていく時代ではなくて、今あるストックを再生して活用していく時代なのです。例えば、昨年、私も参加しましたが煉瓦倉庫で美術展をするとか、今までせっかくあったのに何も使っていなかったものを活かしていくという発想は、育てる発想です。残して保存していく発想ではなくて、ちゃんと使って全うしないと育てる発想にならないわけです。ですから、明治村のようにただ残す世界ではないし、新しいものを作ることとも違うのです。

子づくりやまちづくりは一晩でできるけど、子育てとまち育てはエンドレスだという話を時々するわけですが、教育というのは本当に大変な話なわけです。まちづくりもエンドレスにものを考えていく観点がほしいなと、いま教育学部にきてよかったと思っています。子育ての発想でまち育てを、子供達と一緒にまちを歩いて何か気づいてほしい、感じてほしいと、そういう形で今までやってきていますし、これからもそういう形で地域と関わっていきたいと思っています。

基本的にはつくる発想から育てる発想にといった時に、まちを歩いてみないとわからないという話があって、それが学校の教育でできるとすれば、英国や西尾小学校のやり方があるのかも知れません。地域でやろうとしたら、いわき市のように市民がやっている活動もあるし、浅瀬石公民館が小学校とタイアップしている例もあります。そして理想的と思えるのが英国の都市学習センターの試みです。先ほどほとんど潰れてしまったと話しましたが、新しい都市センターが最近グラスゴーにできました。ライトハウス、灯台という意味ですね。教育に光を当てる。ここは教材を作って売ったり、まちづくりの調査でお金を稼いでいます。先生達が子供達と一緒に関わっていけるという、教育の現場と街の動きとの間に立つポジションのようなものがあるのがあって、「まち学習」というものが総合的に展開できる可能性があるのだということを、この何年か実践してきて考えているところです。

私は本当のところ教育のプロではなくて、まちに関わっているプロということでは自信はありませんが、学校の先生方の前でどこまで教育の部分について話せるかということに関しては自信はありません。ただ、「まち学習」を総合的な学習でやっていく意義というのは、自分としては話せたと思っています。ありがとうございました。

(本稿は平成 15 年 11 月 29 日に行われた教育実践総合センター主催「第 3 回教育実践研究のための講演会」における講演の内容を北原啓司氏にご寄稿いただいたものである。)